

# 蜂起左派

4 ( '74 · 8 )

共產主義者同盟蜂起左派

# 中央集権・非合法党の再建に向けて△その3▽

## 戦略論における客観主義の総括

### A 総括の立場

#### (1) 組織の集中の問題について

われわれは、われわれの武装斗争の敗北とともにあつた党の敗北を総括するにあつて、基本的な視点を組織問題に求めてきた。それは、革命党を単に機能や構造の問題としてだけ考えることではないのは明らかであり、主体的な思想の切開をも意味することである。言うまでもないからである。それだからこそわれわれは、鉄の戦線四号における政治総括と組織総括の分離論に反対し、政治総括における「他律的状况一般」に総括の視点をずえることに反対してきたのである。

旧蜂起派における敗北は、共産主義者としての思想的敗北をも意味しているのであり、それは誰れか一人の敗北として刻印されただけではなく、旧蜂起派を構成した成員すべての思想を問うものとしてあることは明らかである。しかし、その指導的一角をわれわれが占めていたという点において最も主体的な総括が問われ、そしてその総括は組織へと対象化されることをもってはじまり、

今後とも問われ続けるものであると言ふことでもある。そしてそれが具体的に問われたのが七二年秋からはじまる政治警察とのたたかひにおいてであり、このたたかひに如何に勝利し如何に反撃してゆくのかと言ふ具体的課題をめぐつてであつた。われわれは、具体的に問われた課題に具体的に応えてゆくことを要請されていたのである。それは決して従来の組織の在り方、従来の組織に対する考え方は全く不十分であつたのであり、ましてや蜂起の陣型や総蜂起論といった大衆結集政策として問われたのではなかつたのである。まさしく建党建軍の内実としての軍建設が問われたものなのである。われわれは、従来の「党の地上・地下」論に反対し組織の分散性に反対してきたのである。

△注V 蜂起派分裂の直後に提起された『蜂起』（七三・十・

十一月）紙上によるとわれわれが提起している組織の分散性というものを「〇〇は公然領域に活動を自己限定している」「〇〇

〇は指導権を奪取しようとしていた」「〇〇は正規軍の質に耐える質をもっていなかつた」といったような個人攻撃として

考えられている。そもそも「自己限定」させることをもって成  
立していた自己の方針を総括することなく、個人的性格分析こ  
そ組織の分散性の分析でもあるかのように考えられている。

しかも、最近の『蜂起』紙上では「理論」の絶対化こそ組織  
の分散性を阻止しようかのごとく主張されている。組織の分散  
性とは、精神的物質的動員をどこに向けてなされるのかという  
ことにこそあるのである。旧蜂起派にあつてそれは「綱領・戦  
略・組織」と言われた概念上のものであり、具体的には「革命的  
労働闘争」であり「革命的保安処分反対闘争」であり、「革命的  
叛軍闘争」であり、そしてそれらは「人類前途を止揚する総  
蜂起」＝蜂起の陣型に動員することであつた。われわれはこう  
したところこそ組織の分散性の根拠だと考える。戦線政治の頂点  
に「総蜂起＝蜂起の陣型」が展覧されているのであり、その頂  
点に向かつて精神的物質的動員がなされ、実際上組織的には分  
裂していると言ふことができる。それは「地上と地下」が分裂  
しているということに止まらず、現に動員すべき頂点において  
しか統一することができないということにおいてである。それ  
故にますます理論の絶対化と指導の神格化によつて組織成員の  
思想と人格を無視せずには組織の集中は保てないのである。こ  
うして「死せる体系」(パンフ三号)の教条化は組織それ自体  
を形骸化せずにはおかないのであろう。

われわれは、組織を集中あらしめるために過渡期世界党の具体  
分までもとりしまろうとする情勢の中にあつての活動でなければ  
ならない。

こうした活動は、公然と合法的に大担に行なわれるのであろう。  
しかし、このことはすでに述べたように旧蜂起派の「攻撃的非合  
法党」の内実であつた党の「地上・地下」論を意味するものでは  
ない。組織を集中する対象が全く異なるというばかりでなく、政  
治生活の様式それ自体がかつての合法主義・公然主義と異ならね  
ばならないのである。こうした活動が進めば進むほど秘密の集中、  
政治警察とのたたかひにおける緊張、組織的な分業として発展さ  
せられるものである。たとへばそれは合法主義の徹底した利用と  
いうことに進まざるを得ないのであろう。いや進まなければなら  
ないものである。ここまで進まずして、市民社会を解体すること  
はできないであらう。

(四) ますます観念化し反動化するほとけ派

われわれは、ここで、『蜂起』五六号(七月十日号)一面論文の  
日共まがいの無責任な評論をとり上げておきたい。この論文は  
「武斗派の革命論の深化を」と題して論争的に提起されている。  
われわれは、彼らの一人よがりを見無視してよいわけだが、どうし  
ても一言ふれておかなければならないのはこの論文の筆者以外は  
個人主義でブルジョア政治家であつたとして「新左翼」とりわけ、  
共産主義者同盟に結集し、たまた、いまだ獄中にあり、そして  
傷つてつたすべての同志をばかむりさつていふというその思

的核心に向けて自らを組織すること、組織を動員すること、これ  
こそ第一の反撃であり、建党建軍の核心をなすものであつたので  
ある。同時にこれこそ組織の分散性を克服するものに他ならない  
のである。われわれには、こうした組織の集中があつてはじめて  
公然領域において活動することが可能なのである。しかし、その  
場合においてもなお、公然たる運動の発展の延長にソビエトや武  
装蜂起を夢想し、そして、この公然たる運動に主観的にソビエト  
運動論とか総蜂起論とかいつた意味附与することは誤りである。  
われわれは革命運動することを具体的には保安処分反対、刑法改  
悪反対、爆発物取り締り弾圧反対、あるいは賃金闘争として活動  
することを拒否するのではなく、その先頭でたまたかわねばなら  
ないと同時に、それでは全く不十分なのだということ、あるいは  
そうした活動やたたかひに総蜂起とかソビエトとか暴動とかいつ  
た意味附与することによつてそのたたかひの水準に止める政党派  
に對して断固として反対しなければならぬのである。階級斗争  
に決起している意識的なプロレタリア人民(ないし、自然発生的  
)に反政府活動に止まることもなく自己を支配階級へと組織すべ  
きこと、現支配階級を打倒する手段を考察するように訴へること  
そして自からの政党政派を形成することを訴へ、過渡期世界党へ  
の結集を呼びかけることでなければならぬ。これが七〇年代の  
とりわけ、革命戦争によつても支配階級を打倒し世界革命を実現  
せんとする党派にとって、刑法改悪をもつて、全ての反政府的な部

いあがりに対して断乎として鉄槌を加えておかねばならないから  
である。この筆者は超歴史的に存在し多分、「新左翼」、共産主  
義者同盟と縁もゆかりもなかつたのであろうことを如実に示して  
いる箇所の引用をしてやく。

『「論理主義は個人の主体性主義と密着して小ブル急進主義  
を支える結果となつた」、樺本の主体性論や宇野三段階論は、  
機械的唯物論と単純で平板な歴史主義に對して一定の批判的役  
割を果した。代々木の官製理論を守るために御用学者は彼等を  
小ブルだと批判したが、そこからは何も生まれなかつた。』

④ 一方、新左翼に定着した論理主義は個人の主体性を強調す  
る傾向と混在しながら、階級斗争にかかわる独特な政治姿勢を  
生み出していつた。即ち、客観的に存在するプロレタリアート  
の闘いを、階級に服務する思想で工作することより、政  
治的にビビットに反応する学生層のダイナミズムに依拠して自  
己を権力斗争に押しあげるといふ政治主義が生まれた。……  
略……

⑤ したがつて、政治が好きだから、政治のダイナミズムに  
展望があるから、という無責任(どちらが無責任なのか一引用  
者)なかわりが生まれ、階級に責任をもたずに闘いをやめ、  
戦線を逃亡し、階級的裏切りという重さも自覚せずに自供する  
弱さを許すことになつた。……略……『歴史の弁証法に論  
理の弁証法を統一する方法こそが論理主の正しい止揚である』

(注、二重カッコは、この論文の節と節の小見出し、④、⑤引用者)

この論文の筆者は、東京社学同とその分裂↓M・L社学同⇓M・Lブンド、その分裂↓ブンド統一委⇓第二次ブンドその分裂と全くかわり合うことなく、ある日突然ブンド蜂起派を名づけているということ、または、ブンド八回大会から先行性ファシズム論を自己主張しているようだが、これが全く役にたたず、「新左翼」と共産主義者同盟には無視されてきたことを自己暴露しているということをまず確認しておこう。

冒頭引用二重カッコ(『論理主義……』)の内容が「新左翼」でありブンドであるということと言っている訳だが、こうした切り捨て御面のレッテル貼りこそ日共のとくいとするとところである。六九年以降は、警察・ブルジョアマスコミ・日共の合唱のもとにすめられた「反過激派」キャンペーンではなかつたか。「小ブル」過激派「トロッキスト」こういったレッテルのもとに警察、マスコミ、日共は、この数年間武装斗争を弾圧してきた。また、一部の革命的同志諸君の間にも、自己のたたかきを「小ブル急進主義」だったという無総括の乗り移りを見ることが出来る。まさに、自から組織してきた階級斗争と組織建設の路線を具体的な実践過程の分析とともに検証するのではなく、思いつきのなレッテルをハリ、切り捨て、乗り移るというこの政治的無節操こそ無責任ではないか。この論文の筆者は、なに故に、ブンド八回大会と

先行性ファシズム論が「新左翼」とブンドに無視されてきたのか？をまず考察するところから出発すべきである。そうでない限りこの「蜂起」論文、筆者こそ、まごうことなき個人主義者であるというべきである。

共産主義者同盟にとつての論理主義とは、まちがいはなく、戦略であつたはずである。ブンド統一再建大会(六回大会)は「反帝斗争をプロレタリア日本革命へ」がスローガンとなつてきたのであり、当時の「戦旗」によれば「戦略、戦術の党」として自己規定していたのである。そして、七回大会においても、世界同時革命のスローガンとともに「反帝斗争をプロレタリア日本革命へ」というスローガンはおろさず、かかげられていたのである。しかも、内容的には、三ブロック階級斗争⇓世界同時革命と「帝国主義の侵略・反革命を世界革命に転化せよ」という戦略スローガンが挙げられち密化されたと言うべきである。八回大会議案書が公表されていないという事情のためそれを内容的に分析することはできないが、しかし、この戦略論のさらなる深化(さらぎ流)がなされたことは間違いないであろう。こうして、我々は、六七年二つの羽田斗争をはじめとして、エンブラ、三里塚、四・二八、ASPAC、十・二一防衛庁、東大、四・二八斗争をまさに休む間もなくたたかいつづけてきたのであつた。このたたかいはまた、我々のみではなく、六七年以降、「新左翼」ブンドに結集した先進的活動家のすべて、何十万という大衆によつてたたかわれたので

ある。そして、なによりもそうした、たたかきを我共産主義者同盟は断頭として最先頭でたたかき抜いてきたのである。この我々のたたかきをすべて、小ブル急進主義・個人主義として切り捨て、これまでの運動の理論の審判のない無から「蜂起」執筆者は出発しようというのか!!君は、いったい共産主義者同盟でなにをやつていたのかね。アルバイトに精を出していた訳でもあるまい。話を元にもどそう。共産主義者同盟の戦略が論理主義的に提唱されてきたということ。この戦略の主体化こそ突撃を呼びかけるものとなつてきたのであり、そして、この戦略の緻密化、ないし深化として主導的見解が愚無元的に提起され、「戦略で党をつくる」という全くの逆だが、平気でまかり通つたのである。その典型は、六回大会書記長の水沢史郎氏であり、「暴革(仏徳二)『序、方法論』」の「帝国主義論が党をつくる」ということに示されている。こうした論理主義⇓客観主義こそ総括されつくされなければならぬのである。

④の項に移つて、ここを分析してみよう。「新左翼に定着した論理主義は個人の主体性を強調する傾向」——いったい筆者のいう新左翼とは論理主義とは何を意味しているのか。これまで具体的に表現された傾向を考察した後にかかる規定が与えられるのではなく、何が新左翼で、何が論理主義なのか。そしてそれが新左翼、あるいは共産同の主導的グループの思想をどのように決定したのか、が全く不問のまま次々と規定されてゆく。そもそも「戦

略が党をつくる」「帝国主義論が党をつくる」ということこそ逆だちしているのではないのか、これこそ「階級斗争にかかわる独特の政治姿勢」思いやり、客観主義なのである。こうして「政治姿勢」こそ、同盟を喰ひものにし、同盟をつねに危機に陥し入れ、誠実で献身的な活動家をも「政治主義」として抹殺するものとなつてきたのである。「学生層のダイナミズムに依拠して自己を権力斗争へ押しあげるといふ政治主義が生れた」、六十年代の「新左翼」七共産同は、「戦略で党をつくる」という水準にあり、しかもこの時代の階級斗争はまさに学生層に大きく依拠してきたことは事実であり、そしてそれを指導してきたものこそ共産同であつたということ、これを、「小ブル急進主義・個人の主体性主義」といふときそれは、明らかにこの筆者が大半の責任を負わねばならないであろう。なぜなら「第〇回大会議案書は我々が執筆した」などと、ことあるごとに主張しているかぎり、まさしく、自からブルジョア思想に解体されており、ブルジョア個人主義を体現して、どうしてブルジョア思想に解体されている労働者大衆を革命的階級へと説得することができるであろう。

われわれは、そうした六十年代の斗争と運動と党派によつて形成され、その飛躍、自己止揚の過程を含めて現在の諸分派、諸グループが形成されており、更にこの諸分派、諸グループが大きな政治的傾向として、再び戦略から党を規定しようとする大衆運動主義的傾向と綱領を基軸とする戦術、組織に対する思想の統一と

として単一非合法党建設の傾向となつて党派斗争・階級斗争が進展しているものだと考へる。階級斗争のダイナミズム、運動思想のラジカル性のないところに党派を形成しようなどというのは、宗教でしかない。「武斗派の再編の基準が軍事で、論争の基準が方法論だ」こうした提起は机上の空論でしかない。そもそも筆者によれば「新左翼」・ブンドは個人主義であつたはずである。武斗派が突然、執筆者の都合によつて形成されたのではないからであり、しかも基準なるものがダイナミズムとラジカル性を抜きにし単一党建設をステータックにしているということである。そして基準の内容をみると、軍事は「政治と軍事の落差」論であり、組織的には六九年の水準を一步も抜けていないということ、方法論とは帝國主義方法論で客観主義的戦略を導びく承でしかないのである。これで武斗派の再編を呼びかけるとき、それは合法的なそれにしかならないのは白明である。百歩ゆずつて、こうした基準のもとに統一戦線を成功させた(彼らの主観で)。「五・一五」の成果はいつたにいなにかね。

共産主義者同盟の戦略論が客観主義であり、論理主義であつたのであり、この論理主義は戦略で党をつくる主義に思想を接木しても本質的な総括ということにならない。帝國主義方法論に〇〇思想や〇〇論を補充しているとしても、戦略で党をつくるという思想に変わりはないのである。それだからこそ、「新左翼」ブンドの総括を個人主義などと無責任な総括ができる精神構造になつ

て。もちろんこの叛旗・日向派のいずれも軍事反対派として烙印を押されたごとく、六八年十・二一以降とりわけ六九年秋期斗争からの脱落ということを見落してはならない。ただ脱落するそれなりの背景があるということは見すえておかなければならないということにすぎない。

いづれにしろこの「蜂起」論文筆者は自己を超歴史的存在にすることによつて、社会学的評論を試みてゐるということ、こうして「小ブル急進主義」過激派」なるレッテルのもとに、政治意識、ブルジョアマスコミ、日共とともに蜂起を放棄して歩みはじめたということがができる。それ故、彼らの主題たる「武斗派の革命理論の深化を武斗派再編へ」という願望は、どこまでいつても願望にすぎないであろう。

#### (ハ) 総括の立場とは何か

われわれは、六十年代の運動と共産主義者同盟とその分裂についてその渦中にあつたものとして主体的総括をするが故に、「第二次ブンドはあれがなかつたからダメ」だとか「小ブル急進主義だからダメだつた」式の清算に断固として反対する。われわれは、ブンドの核心こそ戦略主義にあつたと考へるし、この戦略主義を戦術へ純化するとき、ブンドの分裂が開始され、われわれは戦略主義を十分に総括しつくすことなく、党・軍を赤軍派に對置してきたのである。われわれ、鉄の戦線派Fへ帰還していつた多くの諸君は、軍事として煮つめていつた赤軍派に對して、戦略主義の

てゐるのである。

④項の批判的結論を述べると、この「蜂起」論文筆者は「戦略は正しいが思想的立脚点がなかつたのがブンドだ。」とし、そこから「思想的立脚点を世界党史観として定める」ということにある。だが、これに對するわれわれの批判的結論は、かかる思想こそ観念論の見本だということにつきる。

⑤項に移る。この「蜂起」筆者は自からの同盟指導の主導的地位を放棄し、「政治が好きだから」「論理よければすべてよし」といつた具合に政治的に乗り移つてもよいと考へてゐるらしい。そして、「無責任にも同盟にかかわり、階級に責任をもたず」(サークル的仲間うちでは責任をもつてゐるのかね) 同盟の分裂と解体をしてきた。「――というようにアレレンジして読む最もふさわしい文章である。

自己の政治活動を点検することなく、むしろ自己の同盟指導の百歩の正当性を主張し、「新左翼」と同盟に結果してきた誠実で献身的な活動家に責任のすべてを転嫁してゐる。共産主義者同盟の分裂と「媒体」は、こうした活動家にあるのではなしにあげて同盟の指導部にある。そもそも「戦略が党をつくる」という思想こそ観念論であり、組織を危機に陥し入れてきたものでありこの思想を総括することなくこの思想を絶対化するところに、その裏返しとしての共産党内における、叛旗派と日向派の政治的胎頭があつたのである。そして、蜂起派の叛旗もそこにあつたというこ

ろ行きつくところが結局戦術であるというブンド主義の克服とともに党と軍を對置したのではなかつた。そうした意味において六九年秋期斗争の後に新たな軍事反対派をわが共産党内に進み出したのである。この軍事反対派は、戦略主義的傾向に右翼的に反撥したたかわずして、右翼から宇野・黒田の内容でもつて論理化したものである。われわれは、戦略主義をその内容の緻密化として、秋期斗争をたたかうとともに、過渡期世界論の再構築として鉄の戦線派を形成してきたのである。この段階では、まだ、「戦略で党をつくる」という思想が問われたものとしては自覚してゐたわけがなく、それ故、ブンド分裂の総括はもつぱら戦略論、過渡期世界論として対象化されるものとしてあつたのである。(十二・一八鉄戦派主張「共産主義十四号」) こうして鉄の戦線派(ざらざら派)は、ブンドの核心である戦略主義と革命的敗北主義の思想を問うことなく、戦略主義「客観主義と革命的敗北主義の不十分性を歴史観(世界党史観)の薄得ないし、戦術主義への補充をしてきたのである。これが、「鉄の戦線」一号から三号の内容であつた。そして、この内容は、「綱領・戦略・組織」という具合にも表現されてきたものである。この内容をもつてわれわれは、

「攻撃的非合法党」建設、先進国武装斗争を闘つてきたのであつた。しかし、この内容は、ブンドを総括しつくし、不変・不動・不敗の内容と思われていたにもかかわらず、七一年春における最高指導部二名の脱落と七二年秋からはじまる政治警察とのたたか

いにわれわれは敗北したのである。このことは、われわれにわれわれの根底的な思想の総括を迫ったのであり、われわれの結党（鉄戦派）の内容をも再検討することを要求し、もってわれわれ旧蜂起派の団結は固められなければならないのである。従来の思想をもつて従来の理論を防衛し、またはその理論の不十分性に新たな理論を接木し補完することをもつては、旧蜂起派の前進のみならず、武装斗争派の再編につらなるであろう階級斗争の前進とはなり得なかつたのである。

われわれが、総括の基準、または立場をこのように自己規定するのは、これまで総括とは清算であるかのように、切り捨て、乗り移りが横行するなかにあつて清算主義に断固として反対するからである。われわれが清算しなければならぬのは合法主義的党であり、理論の絶対化というサークル主義・ドグマチストである。レーニン流にはまさに「第三期を清算せよ」ということに他ならない。

### B 攻撃の軍事戦略・重心攻撃論の整理 ——攻撃の軍事戦略・その政治的位置——

旧蜂起派における軍事戦略論の政治学的分析と民主主義的意識の止揚こそ、われわれの総括とならなければならぬ。

われわれは、すでに「先進国武装斗争」論が何によつて敗北し

渡期世界論」批判となるであろう。

われわれのこの作業は、単に蜂起派の敗北の内容を明らかにするにとどまらず、この数年間の武装斗争のその敗北の内容をも照し出すことのできるものとしてであり、同時にそのことは単一非合法党建設と武装斗争の前進をうらなうに十分足りうる内容として提起されることはない。

「攻撃の軍事戦略」として、われわれ「鉄の戦線派」蜂起派」に軍事戦略を要求したのは、『鉄の戦線』三号によれば、

「我々は関西派（合同関西三派）引用者）の諸君が『戦旗』（十二・一八連合ブンドにおける合同関西派軍事委員会論文）引用者）第二一五号において『恒常的武装斗争の若干の教訓について』を発表した時点において、この論文の積極的意味を評価したりえにたつてなお、次のように批判した。『関西軍事委員会論文の最大の問題は、その平板性にある。それは、恒常的武装斗争についての規定のなかで一度も戦略概念が登場しないことに端的に示されている。いや、関西派の諸君が考える戦略概念は、あるといへば、その内容は『党とプロレタリアートを蜂起に向けて鍛え抜くこと』である。しかし、戦略をこのように規定することは問題の半分を語つたことにしかならない。そして、そのことは、実は何も語っていないことに等しい。すなわち、我々は党とプロレタリアートを蜂起に向けて鍛え抜く過程で、どのように対象的世界そのものを変革し、また、

てきたのか、を分析してきた。それは「ほとけ派」のごとく、米中ソの平和共存主義や「連赤の敗北」や中核派等の大衆武装の問題として、情況一般によつて敗北したのではなく、あくまでもわが蜂起派の党建設にあることを強調してきた。われわれの党建設が「先進国武装斗争」の前進の論中で組織的には合法主義として理論的には客観主義として問われたことを明らかにしてきた。われわれは、さらに突き進んで「先進国武装斗争論」となつてきた「攻撃の軍事戦略・重心攻撃論」（鉄の戦線三号）を解り易く整理しその客観主義的傾向を批判しておかなければならない。われわれが「攻撃の軍事戦略・重心攻撃論」を整理しておくことは、共産主義者同盟七回大会・過渡期世界論・世界同時革命として六十年代後半の大衆的武装斗争を領導し、この大衆的武装斗争と同盟の飛躍をどのようにするかとして「六九年七・六」があり、そしてそれらを再構成するということにおいて「仏・過渡期世界論」（鉄の戦線一号）となつてきたのである。この「仏・過渡期世界論」を内容として「攻撃の軍事戦略・重心攻撃論」がある。われわれがこれを整理するということは「重心攻撃論」が「自衛隊解体論」となつて、戦略の戦術化と党の「地上・地下」論となつてきたことを浮きぼりにするということになる。蜂起派が敗北した、直接的内容として整理してゆく方法はわれわれが「攻撃の軍事戦略」として表現しなければならなかつた政治的背景をまず明らかにすることからはじめ、内容的批判は鉄の戦線一号の「過

そのことを通して、どのように変革主体そのものを変革していかのかを語らねばならないのである。我々にとつて、蜂起に向けての戦略とはそのようなものでなければならぬ。

そうでないならば、主体の変革のみが目的とされ、即時的プロレタリアートから向自的プロレタリアートへの転化を戦略とする革マルと我同盟を区別する唯一の点は「軍事」になり、このように指定したとき、軍事そのものが主体形成のための軍事、すなわち、個別斗争と訓練のための軍事の位置づけでは、日向派のそれと本質的に異なるところがなくなつてしまい、関西の諸君の軍事に対する献身性にもかかわらず、軍事そのものを実は組織し得ないのである。そして、『鉄の戦線』二号『世界プロ独への軍事問題』において、我々はこうした関西の軍事に對する考え方の基調をなくして『左派』（ブンド神奈川左派）引用者）一号、『現代革命の軍事学』批判へと向い、その基調が、ブンドレ・グリュックスマンの『戦争論』であることを明らかにした。『左派』に対しては「政治の継続としての戦争と党・階級の防禦に對して『左派』の『思想』は、防禦の優位に一切の基準を求めることにより政治を放棄する關係にある」ということである」（鉄の戦線二号P四〇）と、何よりも政治の欠如を批判するとともに、先進国持久戦（防禦の優位）を批判し、A・グリュックスマンに對しては「ブルジョア軍事学」として批判した」（鉄の戦線三号）となつてゐる。

『鉄の戦線』三号における「攻撃の軍事戦略」の提起、その政治的背景は、以上の引用によって明らかなく、ブント神奈川左派の「防禦の優位論」を戦路とするのに対してなされていると、いうこと、ブント神奈川左派の「防禦の優位論」が基調となつて、十二・一八連合ブント内合同閩西派軍事委員の軍事路線があるといふこと。この路線はスタテックな主体形成主義になつてゐる。こうした合同閩西派との党内斗争という背景をとらなつて「防禦の軍事戦略」に対する「攻撃の軍事戦略」論が展開されたのである。そしてこの「攻撃の軍事戦略」の内容は、「日帝の重心、自衛隊を攻撃」というものであつた。

われわれは、六九年秋期斗争を闘い、その斗争の総括を、われわれの戦路論上の軍事に引きつけた再定式と同盟の組織的改組を意味するものとして提起してきたのであつた。この間の事情（日向派との党内斗争という性格をもつ）は、『鉄の戦線』一号「共產主義をめぐる論争への我々の問題提起」（P六七）に詳しく説明されている。そこで、引用しておくとして、「帝國主義の下部構造の同質化・均質化した危機を客観条件として提出するのであれば九回大会五Cで論争され、前段階決戦を「帝國主義の侵略・反革命を世界革命戦争へ」としてテーゼ化する根拠を与えた。

「戦争の性格の変化」を媒介として、よりトータルな過渡期世界の階級斗争の解明が必要なのではないか」ということとして「帝國主義の侵略・反革命を世界革命戦争へ」となり、これはこの

間の武装斗争派のスローガンにもなつてきたものなのである。ところで、『左派』派が「永き世界革命戦争へ」のスローガンに徴されること、階級社会における支配階級の支配する危機と被支配階級の支配される危機の分析（勿論、これまでのブントに於ける革命戦略は一方的な、客観主義的な支配の危機の分析に他ならなかつた）とともに、これを軍事戦略に引きつけてゆくといふことでもなく、毛沢東の持久戦論とA・グリニョックスマンの現代戦争の戦略思想をアレンジし、これを同盟の軍事戦略にするという誤りを批判することなしにはわれわれ（九回大会ブント）が実践的に獲得してきた内容を防衛し発展させることは不可能であつたのである。ここにわれわれの鉄の戦線二号と三号の軍事論文の位置があると言わねばならない。つまり、ここでは、われわれの実践的諸内容を防衛するといふことが意図されていたのだといふことである。

さて、ここで『鉄の戦線』三号の内容を順次追つて見てゆきたい。

内容構成は、『序』『我々の到達点』『A・グリニョックスマン』『クラウゼヴィッツ』『左派』『日帝の重心——自衛隊に集中砲火を』という節構成になつてゐる。

先ず『序』において、六九年秋期斗争からはじまる武装斗争の意識を次のように規定する。「三里塚斗争の質を規定していたものは、この間の都市機動遊撃戦であつたといえる。いうならば、

三里塚斗争は、この間の非公然斗争が形成してきた階級斗争の枠組の中で闘われた闘争であり、さらにいうならば、中核派の大衆的武装斗争における突出をも、その内に抱括してしまふような階級斗争の枠組が、七〇年代先進國武装斗争として形成されつつあるのだ」として、蜂起派における七一年から七二年にかけての武装斗争の準備を、赤軍・京安の二派止揚となつて、党の非公然軍隊の建設、すなわち地下正規軍の建設が主張される。そして

「軍事が政治そのものとして扱えられねばならない」時代である。しかし、第二次ブント時代を含めて「主体形成——党形成のための軍事であつた」——これではダメであることが強調される。こうして、この論文の展開されるであろう内容が示される。

「我々の到達点」において「我々の戦路の基軸がすでに提示されている」として『鉄の戦線』一号の「過渡期世界論・戦争論」の内容を紹介し、これを「継続・発展させる」となつてゐる。

「A・グリニョックスマン」の項にあつては、「A・グリニョックスマンは、現代世界の戦争を目的としている。その二つの態度である米帝の核戦略と毛沢東の『持久戦論』の対比を試み、毛沢東の優位を認めようとする。ここに左派が、A・グリニョックスマンに傾斜した根拠がある」として、グリニョックスマンの内容を紹介し、毛沢東の持久戦論を教条化し、それを、世界革命戦争に到る同盟の戦路の基礎とすることに反対することを表明し、「先進國武装斗争——蜂起（臨時政府樹立）・世界革命戦争——世界プロレタリア」とい

人類前史を止揚する戦争の全過程として明らかにすることを通して批判しつづきなければならぬ」としてゐる。

「クラウゼヴィッツ」において、「クラウゼヴィッツは戦争独自の論理を措定」したものであるとして評価されている。この評価の基本をなすところの内容は「戦争は政治におけるとは異なる手段をもつてする政治の継続にほかならない」（『戦争論』岩波文庫版）とする命題である。こうして、クラウゼヴィッツの内容が紹介される。

「『左派』」、ここでは、左派・閩西派の軍事論の主体形成主義ともいわれる内容が紹介され、そして、コメントがなされ、蜂起派の軍事論の積極的主張の視点が示される。「ベトナムの例をみると、これが単なる防禦でないことがはっきりする。米帝にとつて、現在のアメリカ社会の分崩状況が示しているように、米帝軍のベトナムにおける敗北は、米帝本国内における国民結集軸の喪失をもたらしつゝ、

クラウゼヴィッツの用語でいえば米帝にとつて、重心は軍そのものであり、ベトナム人民は、これを攻撃し、解しりる位置にあるが故に、防禦が同時に攻撃としての意味をもつてゐるのである」といふ視点である。

『日帝の重心——自衛隊に集中砲火を』ここでは、クラウゼヴィッツの『戦争論』に学び、『左派』批判のうちに積極的主張がなされていた、その視点を叙述がなされてゐる。

すなわち、「重心とは、日帝にとつて『政治的力』戦路上の力』

となる点である。いいかえるならば、重心は、日帝における、軍と國家とを一本として貫くイデオロギー的軸の具現化である。

それは、軍隊であろうか、首都であろうか、皇居であろうか、天皇であろうか、それとも国会や官邸であろうか？

それは、平和と民主主義が終焉した現在、明確にはない。

だが、現在、日帝権力は自衛隊をかかものとして、海外派兵を媒介として育成せんとしている。

すなわち、反共ナショナリズムの軸として自衛隊をイデオロギ一的にも形成しようとしているのである。(鉄戦一号、P五四、破防法研究 10 仏論文)

しかし、現在の自衛隊は、政治的結集力は弱い。この形成過程で重心となりつつある自衛隊を、軍をもって攻撃すること、これが我々の軍事戦略の基軸である。

だが、軍事を組織し、日帝権力の重心に自衛隊との戦闘を闘い、それを支援してゆくことが、蜂起にいたる党の闘いの全てではない。党は、その戦闘が形成する全社会的分解を合法にせざるべからず、非合法下にあると、蜂起に向けて組織し、定着させていかねばならない。」と展開されているのである。

われわれは、ここでは二、三指摘しておくにとどめておきたい。なぜなら、この「攻撃の軍事戦略」は、あくまでも、日間的、左派派の主体形成主義を批判しているという当時の政治的意図を認めるからである。さらに、この軍事戦略論の基軸は「鉄の戦線」一

号、過渡期世界論にあるからであり、この批判には一章設けなければならぬからである。

第一に指摘しておかねばならないのは、当時(七一年九月)における武装斗争の意識が提起されているわけだが、しかし、この意識は、いまだ、「軍事的な力学」を形成しているにすぎないものとして、「新たな政治的質」の形成へ向けて、「赤軍・京安」二派の止揚を提唱している。

それも十分な内容としては提起されていないことである。それでもこの、二派止揚が、地下正規軍建設と武装斗争ということ、公然軍団に反帝戦線として提起されているということである。

だから「新たな政治的質」とは、地下正規軍のたまたかいとそれのたまたかによる社会的分解を公然軍団が組織するものとして考えられていたということである。当時の蜂起派の水準がここにあったということ、現在のにはこうした「党の地上・地下論」は総括しようということではなければならない。しかもこのことは、我々が武装斗争を組織したとき、我々の意図が実現しなかつたからダメなのではなく、そもそも、軍事を結果として政治と切り離したところのものを総括しなければならぬのだということである。

この結果が「新たな政治的質」をも形成し得ないところのものなのだということに他ならない。こうして、「政治と軍事の落差論」(ほとけ派)が平気でいわれる根拠なのである。軍(非合法・地下)に政治が欠落するのは党(公然・地上)と組織上分裂して

るからなのである。この統一を〇〇論の自覚に求めたところで

「新たな政治」にはならないということであった。われわれにとつての新たな政治とは党を、共産主義政治を意味しなければならぬ。だがこのように主張するとき、帝国主義方法論や「鉄の五大大規律」での意志統一、団結の質を、政治の質を規定するものではない。公式の暗記によるのではなく、行動の統一を基準として党内斗争の中央集権的組織化の実現こそ、党の団結を強めるものでなければならぬのである。しかもこの党内斗争は「批判・団結」という原則に従ったものとしてなされることはいうまでもない。党内斗争によってしか、思想の強化はあり得ないのである。勿論、この党内斗争は権力斗争の高中にあるからこそ、より徹底的に中央集権的に組織されねばならないのであり、そして政治警察とのたたかいという上での条件を守って可能なのである。党における思想の点検とはまさにこの政治討論の中央集権的組織化以外にはないであろう。

「プロ独派の潮流形成」(新たな政治的質)がそうした党によってなされるのであって、それは、公然軍団の任務として限定されるものではないであろう。当時の蜂起派が「プロ独派の潮流形成」公然軍団の任務」と考えていたということは、まさにこれこそ、勢力を誇示するところの力学である。なぜなら、武装斗争による社会的分解↓戦線への結集↓反帝戦線の量の拡大ということに他ならないからである。共産主義的政治として考えられていな

いということにあるからである。

第二に、「攻撃の軍事戦略」が主体形成主義に反対して提起されているということ、だからと言って日帝の重心に自衛隊攻撃にならないといけないものではない。しかも、この自衛隊が国民結束力がないという理由によって戦略の内容とすることはできないということである。戦略に対する客観主義。(この総括は次章)

第三に、「攻撃を主要な戦争の形式とすべきである」ということについて、この「鉄の戦線」三号の軍事論文は、「攻撃」を説明するために多くの論証を必要として成り立ってきた。しかし、ここでは次のことを指摘しておく。戦略という概念のうちに「攻撃」の意味をもたせようとする試みが一貫してブンドにはあつたということ、このことは、マルクス―産業資本主義―恐慌―同時革命 戦略レーニン―帝国主義戦争を内乱への戦略、これらはいずれも受動的戦略だ、という規定である。こうして、攻撃型前段階、等々の戦略が飛びだしたのであつた。だから、ここでも、「常設体制三つの弱点、帝軍解体―自衛隊攻撃」となって表現されているということ。いわゆる戦略と一体をなして攻撃が主張されているわけだがそもそも戦略が誤っているということにおいてこの攻撃も誤っているということが出来る。(この説明は次章)

戦略を客観主義的に規定し、そうすることによって、攻撃を主体主義に論理主義的に提起する。こうして、戦略は、突撃とい

斗争戦術に短落する。それ故「攻撃を戦争の形式にする」という、正しい提起にもかかわらず「重心攻撃」自衛解体」に限定する誤りをもたらしたのである。

旧蜂起派の敗北は、政治的、思想上の敗北なのである。にもかかわらず「極と極派」はこのことを踏まえ「論理は正しいが論理を信じなかつた諸個人がよくない」とする没主体的総括によって論理主義客観主義をますます深めているのである。これこそ、プロレタリアートの規律、組織性を認めない、個人主義である。かかる、インテリゲンチヤの特有な非組織的傾向の故に、客観主義的戦略とその戦略の戦術への短落が繰り返し方針とされてきたのである。しかも、この方針は、六五・六年における「ブレ・ファイズム論と日帝の移武装反対」・六六年六回大会における「生活と権利の防衛・反帝斗争を日本革命」、六七年七回大会「帝国主義の全社会的再編攻勢反対、日帝の軍事外交総路線反対」という具合に、一貫して思考上に民主主義的意識が流れている。七回大会議案書の「任務から一節引用しておく」と「民社も公明も、我々の反帝部隊が強化されて、独自の国際反戦反帝斗争を展開するとき、彼らは始めて、左よりのポーズをとらざるを得なくなるのである」。同盟の指導的意識がかかる民主主義的意識にあり、同盟に対して突撃を呼びかけ、そして、かかる政治力学的予想が崩れるとき新たな予想（客観主義）が革命の対象的世界把握と称して提起される。戦略が支配する危機の予測として、仮説として、

この仮説の方法論が、岩田方法論、さらぎ的方法論となって展開されているにすぎないのである。この戦略論は完全に誤っている。この誤りはマルクスの戦略、レーニンの戦略と規定するところにある。またまた、戦略論に進んでしまったが、われわれのかつての自衛隊解体論が「憲法違反で国民結束力がなす」ということを理由の一にしていたということを強調しておくことにする。これは、七回大会議案書任務の一節を引用しておいたごとく、指導的意識がなにかあつたかを確認しておけばよい。したがって、「攻撃を戦争の形式にする」場合、従来の戦略、従来の指導意識は崩壊されねばならないということ——これである。

### C、日帝の重心・自衛隊解体論批判 ——権力論における護憲的発想と

#### 政治学的分析批判——

#### (1) 仏・過渡期世界論の客観主義

仏・過渡期世界論（鉄の戦線一号）の基調は、世界革命の未完として、主体的階級斗争世界と規定するところにある。

これは、一向・過渡期世界論が、ロシアソビエト革命以降を「武装プロの登場」として「制約・逆制約」とテーゼ化したものに對して提起されているということが出来る。

しかし、両者ともに、七回大会における基本任務（大会決定報

告集・共産主義十一号）の五つの任務の次の二つのスローガンに要約された内容の延長にあるといわれなければならない。そのスローガンは、「三、民族解放・社会主義革命、四、労働者国家人民への一切の反革命粉砕」となっており、七回大会におけるこのスローガンは、世界同時革命という基本方針の下に定められたものである。後に（六八年）この「労働者国家人民への一切の反革命粉砕」は、国際共産主義運動の総括及びソ連邦におけるスターリン的歪曲に對する内容的基準のないまま、「世界党、世界赤軍、世界革命戦争」の主張とともに「攻撃型階級斗争論」になつていった。更に、一向的發展が、「攻防の弁証法」といわれた、「赤軍」四号になつていったと考えられるのである。そして、仏的發展が「『さらぎ論文』（共産主義十二号）における過渡期社会論の未来への展望を補助するものとして八回大会総括（二）中委確定）論文となつたのである。私は更に、八回大会が要請した問題、『なぜ路線がぶれるのか』『ぶれを直す方法論を確定せよ』に応え、『世界暴力革命論』でその体系的確定を、基底論の分野でなしとけた』（先行性ファイズム論P四三）という具合に、「第二ブンドの限界を止揚した」とされているのである。こうした自負になつて、七〇年の仏・過渡期世界論（鉄の戦線一号）は提起されたわけである。

だが、われわれがこれらを現在の再度犯え返すならば、いずれも七回大会決定の延長にあるのであり、そのことはまた「労働

者国家」の規定を含む世界革命の展望に戦略化が客観主義的分析によつて成り立っているものであり、そして、革命の物質的基礎の動搖の危機をアジるところの主観的方針が政治方針として提起されてきたのだということが出来る。そもそも、主観主義と客観主義のぶれは五十歩百歩であると言われなければならないし、それが仏的方法論で止揚されるはずもなかつたものとして、仏・過渡期世界論があるのたということである。主観主義が主体を「賭ける」という意味において善意に屏棄できるとしても、方法論の確定に体系化が、世界を獲得してしまつているとする物知り評論家以上の域をでないという限りにおいて、結局でくる結論は、宗教的公式の暗記と一方における危機のアジテーションとしての号令主義——これである。

したがって、仏的發展とは、マルクスの戦略、レーニンの戦略として、マルクス・レーニン主義を戦略論に限定・歪曲することによつて、仏的自己主張仏戦略論が展開されてきているということである。幾度か「戦略」の破産が列印され、方法論と〇〇論によつて補充されてきた。これが仏的發展である。

われわれがこれまで、旧蜂起派の政治理論上の総括を武装斗争党派における組織問題に引きつけて総括してきたのは、われわれこそ旧蜂起派にあつてその党派形成と武装斗争に最も献身してきたと自負するからであり、したがって、その敗北に最も責任をもつものこそわれわれにあるという自覚においてである。われわれ

旧蜂起派形成にあたって、無批判的に仏理論を防衛してきた。仏理論の根幹をなす「帝國主義の崩壊の原理と形態論」の不十分性を補充するものとして、「○○論」を接木し、そしてそれを積極的に推進してきた我々自身の自己批判的総括として進められなければならないものである。更に、我々の先進國武装斗争とその党的敗北によつてもたらされた合法主義と客観主義を仏理論の絶対化と人道的神格化にすくいを求めようとする非マルクス主義の打倒へと突きすすむものとして進められるということに他ならないのである。この理論の絶対化は、あらゆる会議における政治討論の形骸化と組織の形骸化を結果したのである。「能動的主体性、内発的自発性」は公式によつて押しつぶされ、否定される。仏理論の万能化が、行動による、論争による思想の点検を拒否するものとなったのである。この党内斗争の禁止は中央集権主義に真向から敵対するものと言わねばならない。このことは、秘密と指導の中央集権が組織できない理論、小心にある。かかる思想は反プロレタリア思想である。このことは、この反プロレタリア思想という同じ思想・論理によつて、政治警察とのたたかひにおける最初にして、決定的な敗北をもたらしたものである。これが、○○から「同盟議長」にせられた三下り半の思想なのだ。それは、自己絶対化に連なる思想に他ならない。プロレタリアートの組織性、規律性、そして、英雄主義と献身性は、なにかしら公式（仏式○○論）の暗記によつて形成されるのではなく、どこま

でも「現実の階級対立」に根ざした斗争をわがものとする共産主義的意識の昂揚として獲得されるのである。この指導こそ組織上の思想を形成する中央集権主義でなければならぬのである。団結、または規律を規定するのは、「軍の規律で日常生活を律する、宗教的念物」によるのではなく、相互批判、権力に対する秘密、行動における統一、こうして党中央と全党の関係が明らかにされてゆかねばならないのである。

いざれにせよ、われわれは、仏客観主義体系を積極的に許容してきたことの自己否定的総括を進める。

仏・過渡期世界論の骨子を見ておこう。  
第一章、過渡期世界論において、世界革命の未貫徹の主体的階級斗争世界が過渡期世界であると、そして敵の戦略は階級弾圧Ⅱ予防反革命、党の権力斗争戦略Ⅱ前段階決戦として提起される。この仏的命運に従つて、前段階戦略が論証される。論証の軸は、二九年恐慌を内容とするものである。この論証方法は、仏原理論ともいへば、「帝國主義の崩壊の原理と形態論」を導びきの糸として展開されるのである。そして、「現代過渡期世界論」（第二次大戦後）は、同じ導びきの糸として、帝國主義の対立・抗争にもかわらず、政治的協調が強調されつつ展開される。この仏原理論に導びかれる前段階決戦論は、帝國主義の条件が、帝國主義権力内部の党派斗争ともなつてフアンズムの勝利になるといふもので、その前段に決戦だといふものである。この前段階決戦

Ⅱ戦略論は、マルクスもレーニンも受動型戦略であつたといふところから、第二次ブンドに共通した規定であつた。仏的特質は、三十年代の前段階決戦と異なるものとして「現代過渡期世界論Ⅱ前段階決戦論を統一市場分析以前の、そして先ファ権力、プロ独、人民戦線派の三巴として提起するところにある。この特質は、「日米開戦論」や「日朝戦争論」といつた主観主義と異なつてい

第三章、現代革命戦争論においては、米帝國主義の「常時戦争体制」といふ表裏に明らかなく、第二章で分析された内容を革命戦争の側から把え返えそうとするものとして展開され、そして、その弱点が列記される。そこで第三章の節構成を挙げておく。

「日米開戦論」や「日朝戦争論」といつた主観主義と異なつているとは言え、戦略といふ名の下に共産主義を低め、叫ぶする権力をかえりみていなさといふ点において共通するものである。同時に、仏戦略論の特質は、帝國主義の崩壊Ⅱ統一市場の分析を物質的基礎とし、これを革命の客観的条件にするという典型的客観主義なのである。

- Ⅰ A、米帝常戦体制下の過渡的後進國革命戦争と先進國革命戦争
- B、過渡的革命戦争で暴露された常戦体制下の帝國主義軍隊の弱点とは何か
- C、米軍常時戦争体制の本質的弱点を突き崩し、帝國主義軍隊を解体する革命戦争

この客観主義は、第二章、第三章に進むに従つてあらわになる。

Ⅱ 現代先進國革命戦争と日帝権力及び自衛隊

第二章、戦争論、ここでは「階級戦争によるブルジョア戦争の止揚」といふ一般原則の下に、まず、ブルジョアジーの戦争が産業資本主義段階からアメリカ帝國主義の反革命戦争にいたる過程が叙述される。次いで、革命戦争論が三十年代以降の独、仏、スペインの内戦からベトナム革命戦争にいたるまで叙述されている。

A、日帝権力性格と自衛隊海外出動力と機動隊反革命のか。」となつてゐる。この節構成を一目してすでに明らかなく、帝國主義の弱点を客観主義的に分析しているといふことが言えるであろう。これは、この執筆者の分析の直接の対象が変つたといふことを意味するだけの話であつて、その思想の本質が変つたものでないといふことにつぎるのである。帝國主義の不均等発展・対立・抗争と危機が帝國主義

この第二章の結論ともいへば第三章にすべて展開されているからである。そこで第三章はできるだけ詳しくコメントを加える。そして、われわれの主題である客観主義批判と自衛隊解体論の政治学的分析Ⅱ政治力学主義批判へ進む。

権力の性格を規定し、本質的弱点を形成しているといふものである。そして、現代帝國主義を支える軍隊が反革命戦争の

軍事的敗北によってその精神的解体とともに崩壊し、国民的分解を促進する、こういつた図式になっているのである。この米帝の分析の方法は同じく、日帝においても行なわれる。それは、次の言葉に単的に示される。「日本帝国主義軍隊」自衛隊は、米軍よりも結集軸のない軍隊である。日本国民からの合法的合意をとりつけていない。」だから反自衛隊斗争によるさらなる分解を、海外出動前段斗争という結論が導かれる。

こうした主張が客観主義でなくてなんであらう。

こうした主張は大学の諸先生が講議する政治学といつたところが違ふのか。悪いことに、こうした主張を革命論と潜称することである。革命の中心問題は権力問題である、というとき、護権運動として、議会と選挙と異なつて、実力斗争・武装斗争だといふのではあまりにも貧困である。なぜなら、この過渡期世界論は、共産主義者の任務を革命戦争一般以上のことは何に一つ語っていないのである。しかも、この革命戦争が、帝国主義軍隊には弱点があるから、やれば必ず、国民的・社会的分解が起るといふ希望以上には語れないのである。このことは、かつての情勢分析「プロレタリアートの任務」党の任務「突撃の水準」思想にあると言わねばならないのだ。こうした思想が旧蜂起派の敗北を没主体的に状況に求めたところのものである。まさに主導的な指導意識と指導理論の敗北を認めない乗り移りが、または体系主

煽動の一般的文句として説明され、そして、それでもなお不十分であるとして、革命の問題が提起されていくようなものとして、自衛隊の合法、非合法性が語られるといふのであれば理解しうるが、革命の問題は、権力問題で、その権力は帝国主義軍隊「自衛隊」で、その自衛隊が憲法違反でよくないから、これをたれば、国民は喜び、非合法党がつくられ、ベトナム革命戦争とも連帯することになり、世界革命戦争になると言つたようになつた単純な論理である。こうした民主主義的意識の延長上に軍事戦略「革命戦略を構築することはできない。」

われわれは、ここで過渡期世界論・第三章を詳しく引用しおきたい。

「米帝の常時戦争体制は全面反革命戦争に諸列強をまき込むことができず、また全面反革命戦争遂行段階で本質的弱点をさらけ出した。第一に安南の小国ベトナムに対抗する軍事スベンディングがアメリカの恒常的インフレをまきおこしてドル危機を国際通貨体制の弱点としていた。即ち、過渡的革命戦争に対応しただけで資本主義体制の危機を引き起すという基礎的弱点である。第二は、帝国主義軍隊が敗北していることである。

第三の弱点は、常戦体制を担うイデオロギーがヤンキー民主主義の国際的フロンティアであり、競争遂行の先行性フアンズム権力が形骸化する議会制民主主義を残していることである。」これが常戦体制が抱える三つの弱点といわれるものである。

義（実は〇〇論の接木）がいまだに横行している原因なのである。われわれは、第二次ブンドの悲しき諸傾向を総括しつくすものとして、鉄の威嚇「蜂起派を形成してきたわけであるが、しかし、我々自身が仏体系を無批判的に受け入れたという最も恥べき党形成を押し計つてきたと言わねばならない。われわれ自身が第二次ブンドの分裂過程で、同時に分派「党形成において、思想の点検を押しすすめなければならなかつた」といふことが言えるのであり、そのことを含めて、いまその止揚を全力を挙げてなされなければならないものとしてある。勿論このことは、われわれの分派「党形成」といふ姑息な政治のためになされるのではなく、マヌーバー的武装統一或線形成のためになされるのではなく、明確に単一非合法党建設に向けてなされるのである。

#### (四) 政治学的分析「政治力学」客観主義批判

「攻撃の軍事戦略」を提起した政治的背景（七〇〜七一）を本論文のA章で見つけた。我々は、現在においてもこの「防禦の優位性」批判は正しいものと考える。問題は、我々の従来の攻撃が自衛隊を直撃し、もつてその衝鋒によつてもたらされる社会的分解を公然軍団が組織すること、これすなわち「攻撃的非合法党」だとしてきた、この内実の分裂路線の否定になければならぬ。しかし、このことは、組織の合法・非合法問題にのみあるのではなく、自衛隊の国民結集力とかイデオロギー的弱点とかいつたことに期待をかけること自体が総括されなければならない。大衆的

「要するに日帝には国民を我場へ動員する決定的イデオロギーがない。従つて行政国家に編成された自衛隊は、治安出動と海外出兵を要求されたとき、忠誠を認り精神的支柱がなく死を賭して戦うだろうか。というのが三島右衛門の関心事なのである。」これは同じく、この過渡期世界論執筆者の関心事でもある。というのは、引きつづいて、マルクス主義と資本の論理の違いを「人間の死を決断させる」かさせないかとしているからである。われわれはマルクス主義が死の論理だとは考えない。マルクス主義を教義にしてしまふ人々だけが死の論理だと言っているのである。「現実の階級対立」から出発していない人々だけがマルクス主義を教義にすることができるのである。

「日本帝国主義軍隊」自衛隊は米軍よりも結集軸のない軍隊である。日本国民から合法的合意をとりつけていない。既成事を通してなくす的に国防軍としての合意を暗黙のうち認めさせたにすぎないのだ。自衛隊の陸軍力はその装備技術において、アジア反革命地帯に耐えうる力を蓄えているが、弱点は政治的積集力である。」

ここに、米帝軍の弱点、日帝軍の弱点が分析され、こうして「七二年をメルクマールとして、バルチザン戦争を開始しなければならぬのだ」と結ばれる。

われわれはこうした分析を総合雑誌における政治権力分析と等しいものと考え、これをあえて革命論としようとするなら、明らかに力学主義と言わねばならない。われわれはかつて、岩田弘氏の「妥協体制論」を政治力学主義と批判してきたが、この過渡期世界論第三章、内容の違

はあれども構想されているのは岩田と同じ水準である。社会的分解等々は、まさに、社共的分解を意味しているのであって、こうした政党派と労働者階級の決起を抜きに、提起されているところどころに根本的誤りがある。

こうした、分析上の優位が党派性を形成していたというところに真にきつぱりと手を切らねばならない。こうした、客観主義の優位は、今日のほとけ派における武斗派再編なる主張についても表われている。赤報派批判を資本主義批判における最大限綱領主義公然切り捨て主義批判として展開している。ここでは明らかに今日のほとけ派はますます公然主義に純化している証左なのである。したがって、「五・一五」とは公然における戦線の共斗という枠をでていないことはすでに明らかなのである。今日の革命戦争派の再編とは、それぞれの分派に党派の組織的純化を基礎として、その基礎にたつて、単一党建設に向けてなされなければならぬというのが原則とならねばならないのだ。

いづれにしろ、われわれの結論は一貫して、武装斗争によつても、世界プロレタリア独裁を実現するであろうということ、世界革命戦争の前進にわれわれは全精力を傾注するであろうということ——これである。

—了—

## 革命戦争の第二期を切り開くために(2)

——合法主義と対決し、強固な地下党建設をかちとれ！

はじめに

まずもって確認しておかなければならないことは、組織に於いて始めて革命理論は組織化し物質化されるということである。

日本階級斗争は、六十年代大衆武装斗争・ピン||ゲバ斗争の敗北過程から、新たな革命戦争の時代を切り拓くべき、武装革命勢力を発生させた。七十年代初頭この勢力によって端的な革命戦争の斗争形態が創出され、貫徹された。しかしながら、幾度ともなく繰り返された国家権力・政治警察との闘いも、連合赤軍の敗北を頂点として大きく後退を余儀なくされ、再度、革命戦争派の組織思想を問題にしたのである。すなわち、自から掲げてきた綱領・戦略を表現する革命党組織の実態と、その組織上の内実が問われたのである。

現在、革命戦争派の中で、これを如何なる方向性に基づいて止揚するかが問われつつ種々な主張が展開されている。革命戦争派の敗北・後退は歪めない事実である。しかし、重要なことは敗北をもつて清算することではなく、非合法党建設・武装斗争の不可避性を階級斗争の中に鮮明に烙印した画期的意義を踏えて、再びこの地平を防衛・発展させることを自己の党派性として任務を遂行することである。つまり、非合法党組織建設に向けて邁進する

### ☐「蜂起左派」バックナンバー

△主な内容▽

- 1号 (七三年十月発行)
  - △闘争宣言
  - △過渡期世界党建設に向けて！
  - △「総蜂起論」を粉砕せよ！
- 2号 (七三年十二月発行)
  - △一〇・一八集会基調報告
  - △中央集権・鉄の非合法党の再建に向けて
- 3号 (七四年五月発行)
  - △中央集権・鉄の非合法党の再建(II)
  - △革命戦争の第二期を切り開くために

各定価 一〇〇円(二十五円)

申し込みは赤岩社、東京赤羽局私書箱一〇二号へ

こと、ここに一切の基準を置き、非合法党の革命理論を物質化して行くことである。そのことを通して始めて革命戦争派の飛躍があると我々は考えるのである。

我々とホトケ派との党内・分派斗争も、この根本的問題を廻って開始された。72年秋期を頂点とした政治警察の弾圧は、旧蜂起派の合法主義の払拭を突き付けたのである。非合法党建設を叫びながらも依然として合法主義の枠内に止まっていたこと、ここに旧蜂起派の敗北の要因、合・非の対立として宿命的な限界を内包していたのであった。それは、鉄の非合法党建設を如何に組織し得るかとして、文字通り組織問題の解決が問われたのであり、それ如何によつては、政治警察に対する「反撃」なる言葉も無意味に等しいものとなるのであった。しかし、ホトケ派は総蜂起論||「蜂起の陣型」なる大衆運動主義まる出しの方針を持ち出し、それを唯一の党派性にして反動の途へと転じるに至ったのである。我々は、ただひとつの組織、唯一の指導機関を徹頭徹尾、非合法(軍事)で固めること、組織上の思想を中央集権主義として実体化すること、総じて、政治警察との攻防戦に勝利し得る革命党に鍛えてゆくことこそ、反撃を組織する武装斗争の再現の途||革命戦争の再開であると考えたのであった。

現在に至ってもホトケ派は政治と軍事の乖離、合法と非合法の対立、総じて合法主義を何等返りみることもなく、まさしく、このことこそ旧蜂起派が政治警察との斗争に敗北した決定的な要因にもかかわらず、これを避けて通り非合法党建設を目指して邁進する我々に、「組織機能主義」なるレッテルを貼ることによつて自からの延命を企て、中央集権・非合法党建設に真向から敵対しているのである。

69年レベルの「全党の軍事化・全軍の政治化」なるスローガンを挙げ、「武闘派潮流を創出せよ」とアジリ、71年四・二八斗争の二番煎じ以外の何ものでもない「五・一五の政治的軍事的意義」なる空文句を述べたところで、革命戦争派の前進など勝ち取れるものではない。それは、「5・15こそ勝利の道であり、8・25は敗北の道である」（ほとけ派「蜂起」）と単的に表現されている如く、現下の階級斗争の到達地平に無自覚な潮流、すなわち、大衆運動主義とその水準で量的拡大を競い合うことが関の山で、「軍事」をいじくつての業としてしか語ることのできない臆病な合法主義を赤裸々に自己暴露しているに過ぎないのである。

ホトケ派の諸君!!「武闘派潮流を創出せよ」と「カソコヨク」アジりたいのであるならば、もう少し旧蜂起派の敗北の総括を真面目に行なつてほしいものである。

さて、我々はこのに於いて「デマ新聞(蜂起54号)」に述べてあるところの「五・一五の政治的軍事的意義」なる空文句批判(空文句であるが故に批判に値する価値もなく避けようと思つのであるが……)と、「武闘派潮流の団結の環と統一戦線の基準」なる、まさしく、無内容を原則の措定と、それに規定されたこと

ろの空論的な基準の創出が、結局、原則として糊上げすることによつてしか統一戦線をデッチ上げられない、ホトケ派の曖昧な「統一戦線」論を指摘しながら、非合法党の統一戦線は如何なる基準の下に如何なる方向性に発展させなければならないかとして、一定の視点的提起を行ない、最後に、我々の課題でもあり、総じて革命戦争派の課題でもある組織問題に触れていきたいと考える。

### (一) 「五・一五の政治的軍事的意義」なる空文句批判

日本階級斗争の現在の到達地平は、いつまでもなく非合法党建設と武装斗争である。この地平を切り拓いた革命勢力こそ、71年四・二八集会に結集した三派とこの革命的意義を踏まえた革命的戦士諸君であった。しかし、革命戦争派は連合赤軍の敗北とともに、大きく分解し、現在のには、三つの潮流に再編されつつある。それは、(1)再び大衆運動再建派として党建設を六十年代に引き戻そうとする「八・二五」・「烽火」・「赤軍中央委派」等の経済主義||大衆運動主義であり、(2)これと、五十歩百歩の地平に於いてしか階級斗争の前進を問題にできないところの、合法主義に「軍事」を接木するホトケ派と、それに追従するグループである。ホトケ派は、軍事清算派・軍事召還派等々と並べて大衆運動主義||経済主義と一線を画くことに試行錯誤しているよりであるが、旧蜂起派の遺産だけは食いつぶしてもらいたくはないものである。(3)最後に、70年代前半の武装斗争と党建設を前向に総括せんとする諸党派・諸グループである。我々は、この部分との連帯・交流を深めながら、単一の非合法党建設に向けて、更なる奮闘を開

始しなければならぬと考える。

以上のことを踏えて、「五・一五の政治的軍事的意義」なるホトケ派の主張をみることにする。意義なるものは三点から成立している。①最初に「一五潮流を対置しながら、「どの潮流が革命的流れであり、どの潮流が清算の流れであるかを社会的に鮮明にする」などと語呂巻いてはいるが、まさに指摘した如く、大衆運動主義と、その水準で競い合うことを語っているに過ぎない。

②次が、京浜安保共闘との団結が固められたこと(これに関しては、(二) 武装統一戦線とは何かで述べる)、③そして最後に「第三の意義は方針である」と方針も提起しているのであるが、主観主義よろしく空文句を羅列してあるに過ぎないが、その中に、ホトケ派の本質を露呈させているのにふさわしいのがあり、とり上げておこう。

銘打って提出されたホトケ派の方針を要約すると、(1)「権力がつくりだした『軍事アレルギー』と『内ゲバの時代』に終止符を打ち」(2)「軍事清算派を真向から解体する」(3)「刑法改『正』でファシズムの突破口を切り開かんとする……攻撃に……対決し……武装闘争の第三段階を切り開く方向性が全階級に指示されている」と三点に亘つて主張されているのであるが、革命戦争派の敗北・後退が権力のフレームアップ||「軍事アレルギー」のみに基因しているのではない(客観主義者ならともかく)。まさしく、武装斗争を担った革命主体の未熟性、つまり、組織思想をまずもつて問題にしなければならぬというのである。

旧蜂起派の敗北の総括を捨象し、合法主義を温存させながら権力が悪いと何百回泣き叫ぼうとも、武斗派潮流などは決して創出

できないのである。合法主義を総括すること、非合法党組織建設に向けて組織問題に楔を打ち込むこと、この前提の立場を踏えて自から貫徹してきたところの路線を検証することである。そこに於いて始めて革命理論は物質化されると言ひことができる。ホトケ派の如く、この方向性を欠落させるならば、方針なるものは、常に、プラグマチックな場当たり式にならざるを得ないということ、故に「目的意識性に立脚することによってのみ革命的総括は獲得される」などと、空語をもってそれを補足しなければならぬのである。

ホトケ派の方針は、大衆斗争以外の何ものでもないが、しかしこれさえも組織に於いて対象化されたことがない。継承・発展性がないこと、つまり常に、組織総括が捨象されてきたということが言える。そして、ここにホトケ派の本質があると我々は指摘することができる。「権力性格の規定(ファシズム論)」に単的に示められている如く、彼等の規定そのものが民主主義的発想に因しているのである。故に、そこから提起される方針は、非合法党建設・武装斗争とは無遠なものであり、就中、組織に於いて物質化されることはないのである。彼等の方針の意義なるものは、個々の理解力でしかないのである。すなわち、大衆運動路線と「軍事」とを観念的に統一した「〇〇論の誤解力が、彼等の頭の中でなかで観念的に意義なるものを構成しているに過ぎないのである。ここにあっては、総括は客観主義に委ねられ、「軍事」は言葉の遊びとして語られても不思議ではない。総じて、大衆運動の次元にあっては、組織問題と階級規定との統一をできないのがホトケ派なのである。



いってしまふのである。クソリアリズムで「統一」し、これをP L O型統一戦線として意味付与したところで、何を期待することができるのだろうか、これは論述の誤りなどで決してなく、これこそ党を強化し断固たる武装斗争を貫徹するという事に対して臆病風にかかれた言葉の遊びの代表的な見本であり、これが今日のホトケ派なのである。ホトケ派のこのような醜態な姿を革左の諸君も少しは考えてもらいたいものである。無節操な「統一」は、彼等が展開してきた武装斗争の地平を決して押し上げはしないと言ふことである。

さてこの項の第三として、我々は「統一戦線」について、『鉄の戦線』第三号、羽山論文』を総括してゆかねばならないと考える。しかも、否定的に総括されつくさなければならぬ。何故なら、階級分析と諸党派間の依って立つ基盤を無視して、運動と権力問題を混同しているからである。同時に、このことはまた、トロツキーの「権力論」・統一戦線論の総括を基軸としていられると言え、トロツキーが、一貫して自己の階級の基礎と党組織問題とを明らかにすることなく、客観主義的な立場から主観的な方針を提起しているということ、羽山論文も基本的にはこの枠組の中にあるということである。それ故、70年代の統一戦線を革命戦争派の党派斗争とし、また、具体的には同論文(P 36)では「P L O型統一戦線」などと主張しているのである。こうして我々の「試行錯誤」は、まず自からの階級の基礎を打ち固めるといふことを抜きに党派間の一定の共同行動、または一日共闘を統一戦線なる権力問題にしてきたということに他ならない。これまでのものは、党派間の一時的協定による統一行動であり、しかもこれは、

ユダヤ・シオニスト、そしてアラブ各国家に地域的に承認させることを、一つの段階とみなすことによつて、ますます国際主義との闘いに邁進させているのである。現にP F L Pの突出、党派斗争は開始されている。

我々が、こうしたことを考察する時、我々の主張でもあり共産同の立脚点である八世界同時革命・世界プロ独・世界革命戦争勝利Vを目的として党派を形成している諸組織の組織的な純化こそなによりも問われつづけていると言つても過言ではなく、この潮流の下に革命勢力を創出して行かなければならぬのである。しかしこのことは、合法主義的に可能ならばないのであり、しかも「P L O型統一戦線」という具合に、無嫌介に一気に為し得るものではないと言ふことである。

### 白 我々の課題と任務

我々は組織上の思想を中央集権主義とし、この思想の下に、この思想を過渡期世界の非合法党として具体化してゆくことに、党と党を構成するその成員の組織建設の任務を定めてゆかなければならないと考える。

旧蜂起派が、革命的理論と革命党を依然として合法主義に委ね、軍事を接木したところで竹箄行進と「地下正規軍」とに党を分裂させていたことによつて、「先進国武装斗争」と党主体の敗北は必然的帰結として結果したのである。この敗北から我々は、組織上の思想を獲得し、その思想の実現を中央集権主義的鉄の非合法党として構築してゆかなければならないのである。そこでは、大衆斗争の先進的活動家によつて問われている、運動の統一性とそ

反政府運動に於ける共闘の種々重ねであったということ、向かつ合法主義的なそれであったということなのである。ここでの唯一の協定は既成左翼社共に対して、戦闘的左傾化についてのものであったと言ふことができる。もしもえて我々が統一戦線、その武装せる党派の協定ということであれば、70年一二・一八から71年九月までの連合戦線派(一二・一八ブンド合同閩西派と鉄の戦線派)を於いて他にないであろうということである。問題は、統一戦線||権力問題として一時的な協定に意味付与するのは、間違ひであるということ、要は革命的武装勢力を革命的プロレタリアートに依拠して構築することにある。そして、これが合法主義に委ねることによつては、決して為しえないということである。何故なら、武装斗争を断固として支持し、同調する革命的先進的分子は、思想的に実践的に自己を武装することなくして、我々の反対派と政治警察から身を防衛することができないからである。最後に、何とけ派が好んで使いたがる「P L O型統一戦線」の本質性について述べておくならば、これは我々が目指す単一非合法党建設とは、次元を異にするということである。「パレスチナ解放機構」としてアム・フタを最大党派||勢力としてパレスチナ解放斗争の十数組織からなる協議機関は、パレスチナ人民がアラブ各国で難民として弾圧||抑圧を強いられることから、先ずもってパレスチナ民族解放を勝ち取ることを一つの目的として成り立っている。しかし、このことはこの機構がパレスチナ人民の解放にあたる時、そこに於いて国際主義と一国主義的傾向との闘いが内部に孕むことも明らかなのである。しかもこの機構の支配的グループ・党派が、パレスチナ国家を帝国主義とイスラエル||

の指導性一般では決していないのである。革命戦争派・非合法党組織建設の問題として受けとらなければならぬのである。すなわち党の発展(発生活)が自から創出してきた階級斗争のその到達を、党独自の到達として総括することを通して、鉄の非合法党建設をその地平に押し上げたということである。この到達地平を廻つて旧蜂起派の分裂があったのであり、我々はこれを飛躍・発展させることを自からの党派性としなければならぬのである。党派性とは、敵ブルジョア||階級に対する我々の攻撃が革命的組織以外にあり得ないということであり、その組織を我々の党派性として構築するということにある。

旧蜂起派は、青年同盟・A I Fとそれにつづく諸戦線を横断的合法主義的に形成してきた。『鉄の戦線』一号反帝戦線とは「党の正規軍との関連に於いて戦闘を担うと同時に、ソビエト型組織の建設、その運動の展開を担う、一個二重の組織性格を自身に持つ」に指し示めされている如く、非合法党建設が合法的に可能であるかのような主張を行なってきたのであった。この合法主義は、69年共産同の分裂を一つの教訓としつつも、依然として合法主義を引きつづけていたのである。つまり、赤軍派の「党||軍」と情況・叛旗派の「党||大衆」という両者止揚を「党||軍||統一戦線」として提起してきたということであり、この組織方針は、「恒常的武装斗争論」とともに、社会学の青年同盟への統合、反帝戦線の結成となつて、70・12月に至る党内斗争を形成したのであった。

この69-70年の問題提起を旧蜂起派は実現してきたということだが我々の前進はこの組織方針を我々の武装斗争の前進によつて

乗り起えなければならぬ段階に現的には到達しているという  
ことである。しかも、このことは一つの時代、一つの政治潮流を  
71年四・二八三派集会として形成したことに表示されている如く、  
旧蜂起派特有のものではなしに、「蜂起・世界革命戦争派」を形  
成した当時の党派の水準であったということが言える。赤軍派・  
革左・ブンド(連合派)はいずれも、その組織の呼び名は異なっ  
ていても「党一軍一統一戦線」に党・軍・大衆戦線という組織方  
針をもっていたというのである。だが、こうした曖昧な中途半  
端な組織方針が政治警察との闘争に於いて、大きな成果をもたら  
しはじなかつたということが出来る。このことは、72年以降の  
革命戦争派の敗北後退という事の内に明らかなのである。

我々は、唯一つの組織・唯一つの党機関・唯一の党中央の建設、  
その承認として先進的大衆に訴えてゆかなければならない。と同  
時に、青年同盟・AIF・大衆戦線といった合法主義は粉碎され  
なければならぬと考える。勿論、党に準ずる組織の必要性を認  
めないとすることはなしに、党に準ずる組織であっても、敵政  
治警察の面前に組織をさらすべきではないということである。つ  
まり、戦線政治が 大衆運動主義が階級闘争と党建設の前進をも  
たらすものではないということ。党派性がヘルメットの数・色で  
置き換えられてはならないということ。そして、このような諸君  
から「陰謀家集団」等々と指摘されても決して恥じることはない  
ということである。

われわれは、政治警察に党の構成メンバーと、その同調者・  
諸グループ(組織)を知らせることなく、いつでもどこでも敵  
に知られることなく攻撃できる党を建設しなければならぬとい  
うのである。それは、現下において敵との闘いは、機動遊撃戦(爆弾

破壊せん滅戦)なのであり、敵の不意を打つことこそ重要なので  
あり、前哨戦に勝利し、味方の志気を高め、敵の消耗を徹底的に  
削り出すこと、これがわれわれの戦術とならなければならぬとい  
のである。こうした非法法党建設は、七一年四・二八闘争の水準を  
のりこえなければならぬことは言うまでもなく、それは唯一の  
指導機関を徹頭徹尾非法法(軍事)で固め、これを非法法党にき  
たえていくこととして、秘密組織の全技術を、一切のものを利用  
し、全てのものにそれぞれの任務を与えるこ ら開始されなけ  
ればならぬのである。

このような組織建設は、

職業革命家として、

略

自から組織するということがある。

と同時に、革命的プロレタリアートに対する非法法党・武装闘争  
の同調・承認を、敵権力によってではなく、わが革命主体の権威  
の力によって、精力によって、より深い熟達、よりすぐれた才能  
によって、堅持していかなければならないことでもある。このよ  
うに、われわれが組織問題を第一義とするのは、非法法党の中央  
集権主義を徹底するということ、プロレタリアートの無条件な  
中央集権ともつとも厳格な規律こそがブルジョアジーに勝利する  
根本的条件の一つであるということ、更には一九世紀初頭のロン  
アの状況と、レーニンの組織問題に対する態度から、われわれの  
姿勢を決定していかなければならぬと考えるからである。

われわれは、この「組織計画」に基づいて、非法法党が果すべ  
き課題を決定して行かねばならない。それは、組織問題を一切の  
前提・基準としつつ綱領論争として展開する一方、

.....略.....を平準化しつつ、その具体化を克ちとる  
こととでなければならぬ。このこと(具体化)は、単に政治警察  
との緊張にとどまらぬであろうということ、こうして、われわ  
れの規律はますます行動の指針とならなければならぬ。このよ  
うな理論的実践的課題の統一(理論は教条ではなく行動の手引)  
を表現して、始めて、中央集権主義は非法法党の組織上の思想と  
して実体化してゆくものと確信する。

台法主義に革命的鉄ついを

革命戦争派の前進を克ち取れ

了

蜂起左派 4号

発行所 赤岩社

東京都赤羽郵便局私書箱一〇一号

発行 共産主義者同盟蜂起左派

編集 共産主義者同盟蜂起左派機関誌編集局

発行日 一九七四年八月二〇日

定価 二〇〇円

定価 200円